

特定非営利活動法人 地域おこし

# 2017年度 年次報告書





# ご挨拶

いつも地域おこしにご支援頂き感謝申し上げます。

本年は特定非営利活動法人の前身(2005年)から数えて14年目にあたり、来年は15年の節目の年になります。お陰様で池谷集落に住む人は、最も少なくなった6軒13人から現在では11世帯25人まで回復しました。震災前に移住した方が家庭を持ち家族が増えたなど、地域おこしの活動だけの成果とは言えませんが、結果として集落が移住者を受け入れている事実はまさに地域力と言えるのではないのでしょうか。

震災後地域おこしの活動を開始した年より、皆さん14歳年齢を重ねました。高齢により米作りを辞める方の農地の受け皿として当法人が担い、耕作面積も年々増え、今年は約4haにもなり今後も増えます。未だ農業に携わって間もない若者は日々学びながら頑張ってくれています。農地を継承することは集落や地域を継承する事であり、この点地域おこしにとって必須課題と捉えてきました。都会から移住し農地を継承し奮闘する彼らは地域にとって宝物です。

しかし、グローバル経済による安価な海外米の流入や食生活の変化などによる米余りが言われ、米価の下落傾向は顕著で農村経済を脅かしています。日本の食料自給率(Calベース)は38%と公表されており、食料安全保障の立場からも由々しき事態でもあります。圧倒的に多くの消費量を占める都市住民の皆様から、この中山間農村の実態を知って頂き支えて頂く事は皆様の安全にも繋がる事と考えるのです。

引き続きご支援頂きたく宜しく願い申し上げます。

2018年6月  
特定非営利活動法人地域おこし  
代表理事 山本浩史

## もくじ

ご挨拶・もくじ	2
私たちの活動	3
池谷・入山モデルづくり事業	4～6
地域おこし応援事業	7・8
地域復興支援員設置事業	9
応援メッセージ・池谷の将来を考える会	10
会計報告	11
団体概要	12

## 職員紹介

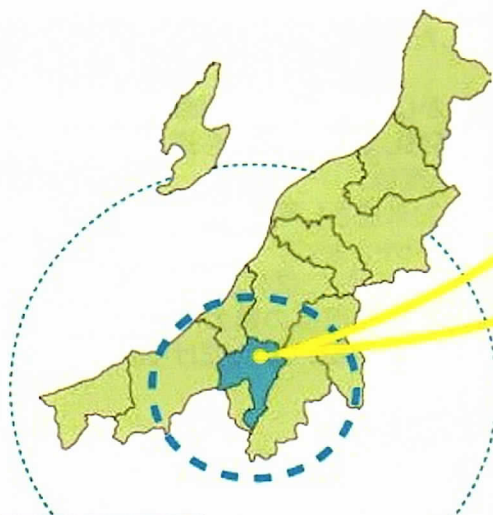


(左から時計まわり)  
馬場豊、森孝寿、福島美佳、多田美紀、  
多田朋孔(理事・事務局長)、山本浩史(代表理事)

# 私たちの活動

## 理念

1. 池谷・入山地区の集落と農業の継続を実現しつつ、全国の過疎の集落が抱えている集落存続問題の成功例を示す。
2. 持続可能な新しい村づくりを実践し、循環型の社会モデルを目指し100年持続させる展望を示す。
3. 地元住民だけでなく地域外の関係者も含めて、新しい村づくりを進める。
4. 相互扶助と心豊かな社会実現を目指す。



まずは・・・

池谷・入山集落を存続させます。

- ・池谷・入山モデル作り事業

そして、

十日町市を元気にします。

- ・地域おこし応援事業
- ・地域復興支援員設置事業  
(里山プロジェクト)

最終的には

日本の過疎の成功モデルを示し、  
日本や世界を元気にします！

- ・地域おこし応援事業





# 池谷・入山モデル作り事業

## ●山清水米直販

### ・平成28年産米

山清水米の全生産者が新潟県の「特別栽培米」の認証を取得し、和日米会様の「限界集落プロジェクト(郷プロジェクト)」に6,300kg(105俵)、農民運動全国連合会に120kg(2俵)、飛渡の未来を創る会に20,700kg(345俵)を出荷しました。

一般販売分としては、「山清水米」6253.3kg(約104俵)、「超特選 農薬・化学肥料不使用『山清水米』はざ架け米」(以下はざ架け米)639.3kg(約10俵)を出荷しました。

### ・平成29年産米

和日米会様に3,900kg(65俵)、飛渡の未来を創る会に13,470kg(224.5俵)を出荷しました。一般販売分としては3月末時点の発送済と予約分で5292.25kg(約88俵)、はざ架け米478kg(約8俵)の販売量となっています。

※特別栽培米…化学合成農薬および化学肥料の窒素成分を慣行レベルの5割以上削減して生産したお米。

## ●加工品販売

2017年度は「山菜炊き込みご飯の素」を完売をもって販売終了し、今後は大口注文のみの受注生産品とさせていただきます。

また、主力商品である「山清水米白がゆ」に関しては、東京・兵庫の神社様から継続して注文いただいております。更に販路を拡大していきたいと考えています。



## 担当からひとこと

山清水米販売担当  
多田 美紀

この数年お米の販売は年々厳しくなっていると感じています。H27年度米の販売量が10tを超え、「よし、この調子で販売量を維持出来れば」と思っていたのですが、今年度のH28年度米は6.9tまで落ちてしまいました。

お米屋さんとの取引量、個人のお客様からのご注文量共に減ってしまっていたので「このままではいけない!!」と奮起し、皆で考え、今年度は早期予約割引・年間予約特典(年6回配送以上ご契約いただいたお客様に2回~4回農産物などをお米に同梱させていただく)を実施しました。有難いことに新米予約量は前年を上回ることが出来ました。

しかしながら、10月以降の注文量は伸び悩み、難しさを痛感しています。落ち込んでばかりいられないので、来年度は、

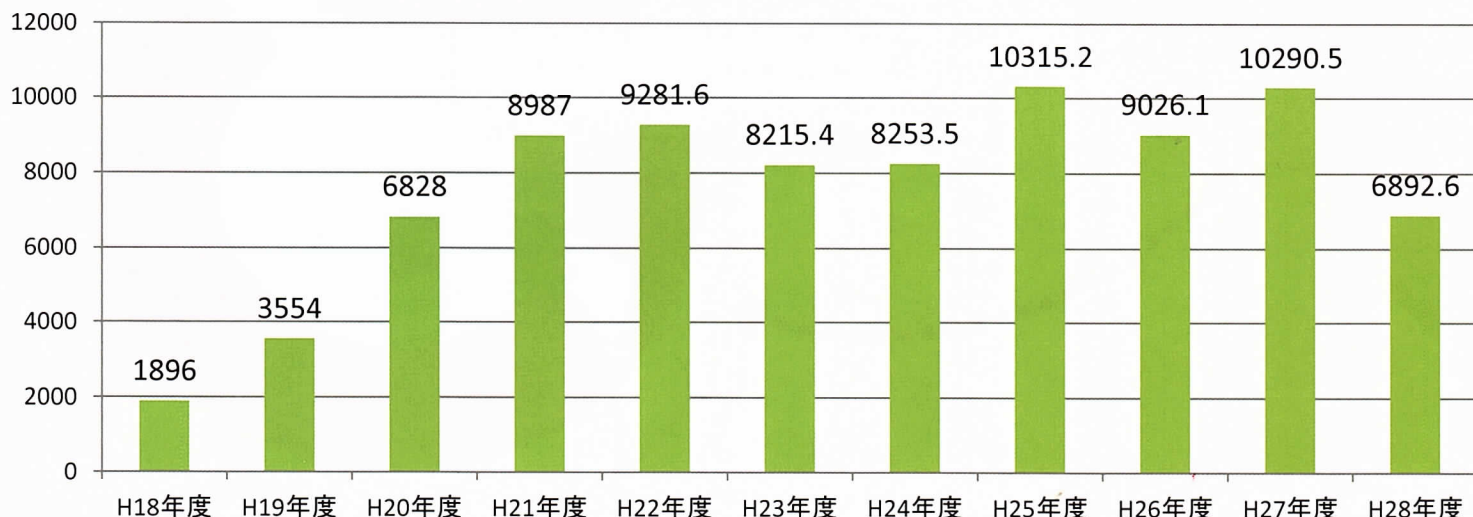
- ① お米屋さん等、中~大口のお客様との関係を強化
- ② ネットショップ・チラシのリニューアル

を実施したく、②に関しては、既存のお客様にも新規のお客様にも商品の魅力や購入方法がわかりやすく、購入したいと思っていただけるような物を作成したいと考えています。

また、2018年には十日町市で「大地の芸術祭」が開催されることもあり、お土産用や贈答用の商品も充実させていく予定です。

厳しい状況ではありますが、1歩1歩頑張っております。今後共何卒よろしくお願い致します。

### 山清水米 一般販売向け出荷量推移(kg)





# 池谷・入山モデル作り事業

## ● 農業生産

2017年度は田んぼの面積がさらに増え、2町4反(24,000平方メートル)の田んぼを耕作することとなりました。

一昨年と違い冬の間の雪の量は平年並みでしたが、夏場から稲刈りの時期にかけての長雨や、管理不足により今一つの収量となってしまいました。

ライスセンター建設について、去年に続き着工に向けての話し合いを行ないました。

野菜については、一昨年秋に約2000粒植えたニンニクの収穫を6月中旬に行いました。8月10日頃には学校給食用のジャガイモを収穫し、その後ポップコーン植え、9月の稲刈り前にニンニク植え、稲刈りが終わったところにポップコーンの収穫をしました。



### 担当からひとこと

農業主担当  
馬場 豊

2017年はニンニクの栽培を初めて行い、思っていた以上のいい出来になりました。次もそうなるように、管理をしていきたいと思えます。

ジャガイモは毎年植えている作物の一つですが、例年並みというかいつも通りの出来になったのではないかと思います。

ポップコーンは植えた数が多くなり管理の仕方を変えたので、手間は増えましたが、収量としてはまずまずでした。

2018年度はさつまいもを植えます。収穫した芋は佐藤可奈子さんに出荷し、干し芋に加工される予定です。

最後に稲作ですが、ここ2年くらい初期の分けつが悪く収量に影響が出ています。これを改善するために、H30年産米は田植え前の肥料の撒き方を変えてみました。また、2017年は秋の長雨や田んぼの管理などの影響で稲刈り時期の田んぼの状態が悪く、機械が入らず手刈りをしなければならない田んぼがありました。今年はそうしたことが無いようにしたいと思えますが、だんだん管理する田んぼの面積が増えてきているので、どこまでできるのかがわからないのが現状です。とりあえず、できることやれることをこつこつとやっていけたらと思っています。



### 担当からひとこと

農業副担当  
森 孝寿

昨年の稲作は一年中天候に悩まされました。思うように作業が進められず、悪戦苦闘の日々でした。

とは言え、できなかった理由をあげて言い訳をしているだけではなんの進歩もありません。

そこで今年は早めの作業工程を計画に盛り込み、日々の農作業に取り組んでいます。

農作物にはやはり生育に適したタイミングというものがあると思いますので、適切な時期に適切な作業を行うことが必要です。

イレギュラーな事態への対応に追われることも考慮して、できるだけ余力を残して計画を進めていくのが理想的です。

農作業には予期せぬ出来事が付いて回るものという前提で、いかにリカバリーするかということが重要と考え、そのためには経験を積み重ね、知識やスキルを身につけていかなくてはと思っています。

秋にはたくさんのおいしいお米を収穫できるように、頑張っていきます。



# 池谷・入山モデル作り事業

## ●体験交流

2017年度は5回の体験イベントを開催し、のべ参加人数は117名となりました。また、交流人口は637名でした。

### 2017年度交流イベント

実施日	イベント名	受入人数
4月29日	飛渡の山菜を楽しみ尽くす会！	16名
6月3日	田んぼへ行こう！（田植え）	41名
7月3日	やまんなかマルシェ in とびたり	150名
7月22日	池谷東京ヨリアイ @東京・飯田橋	22名
10月4日～6日	敬和学園高等学校修養会	45名
10月8日	田んぼへ行こう！（稲刈り）	21名
10月21日～22日、11月11日～12日	地域づくりコーディネーター養成講座	56名
11月18日	新米を食べる会	17名

### 飛渡の山菜を楽しみ尽くす会！

#### 田んぼへ行こう！（田植え・稲刈り）

「食と農を考える飛渡の会」と協働し開催しました。「田んぼへ行こう！」では、昨年につづき飛渡地区の田んぼで「田んぼアート」の田植え・稲刈りを行い、食事は株式会社YELL（エール）とコラボし、同社が経営する市内のレストラン「ALE beer&pizza」の料理をふるまっていただきました。

### 池谷東京ヨリアイ

昨年の「ありがとうの会」を発展させた内容として、活動紹介のほか、NPO地域おこしが抱える課題に対して参加者の方とディスカッションを行いました。この中から出たアイデアをもとに、「新米を食べる会」を開催したり、BBQセット（地元産豚肉と野菜のセット）の試験販売などを行いました。

今後とも年に一回の頻度で、首都圏で集まる機会を設けていく予定です。

### 各団体・イベント受入れ

2016年にも受入れを行った敬和学園高等学校修養会の農業体験受入れ、（一財）新潟ろうきん福祉財団主催の「地域づくりコーディネーター養成講座」を初めて受入れました。

昨年までNPO主催で開催していた「やまんなかマルシェ」は、2017年から「やまんなかマルシェ実行委員会」として独立運営することになり、池谷分校を会場として提供しました。



「田んぼアート」の田植え・稲刈りでは、東京から多くの子供たちが参加してくれました。今後「田んぼアート」の企画運営は、「食と農を考える飛渡の会」が行うことになりました。



## 担当からひとこと

体験交流イベント担当  
福島 美佳

会発足以来、体験交流は池谷集落の地域おこしの要となってきました。しかし、集落では若手移住者も増え、集落内のことは集落内で完結できるようになってきたので、震災復興期からJEN支援期のように集落維持にボランティアの力を必要としなくてもよくなりました。また、東日本大震災以来、池谷集落をボランティアの意味合いで訪れる人も減ったように感じます。

さらに村の方たちの高齢化や、受入スタッフの負担を考え、数年前から体験イベントを宿泊前から日帰りのスケジュールに切り替えました。そういった流れの中で残念ながら年々交流人口が減少傾向にあります。

一方、一時的な「交流人口」ではなく、より深く地域や地域の人と多様な関わりを持つ「関係人口」という新しい流れが全国的に起こっています。池谷集落にも「関係人口」と呼べる継続的な関わりを持つ人が多くいらっしゃいます。今後も多く新しい方に訪れていただけるような魅力的なコンテンツを作るとともに、「関係人口」を増やしていけるような戦略的な取り組みが必要です。

2018年度からは棚田オーナー制「山清水米みんなの棚田」も開始したので、より多くの方に池谷集落を「ふるさと」と感じてもらえるよう、ひとりひとりと丁寧にお付き合いさせていただきたいと思います。